

アメリカ・ヴィクトリア時代の「父性」

高橋 裕子

——「男性的家庭性」をめぐる史的研究の動向——

はじめに

アメリカ合衆国において「父性 (Fatherhood)」を歴史研究の対象として最初に書かれた論考は、一九八二年に出版されたジョン・ディーモスの『The Changing Faces of Fatherhood』である⁽¹⁾。ディーモスは、「父性にはきわめて長い歴史があるが、それを専門とする歴史家は事実上一人もいない」とし、その当時までにすでに興隆していたいわゆる「新しい社会史」においても、父性はその研究対象としてみなされてこなかったことを指摘しつつ、「父性についての歴史研究の誕生が待たれる」と述べた⁽²⁾。

それ以降一六年の間に、現代アメリカで展開されているいわゆる「男性運動 (men's movement)」と影響しあいながら「男性性」の研究は「男性学」の中で盛んに行なわれてきているが、とりわけ社会史および歴史社会学の分野においては、「父性」が一つの中心的テーマとしてその研究対象となってきた⁽³⁾。

また、現代アメリカにおける中産階級の相対的に若い男性にみられる、かつての大黒柱的に職業を優先させる「ファス

ト・トラック (fast track)」よりも、子育てと職業を両立させようとするいわゆる「ダディー・トラック (daddy track)」を支持する現象も、「父性」への高い関心を反映している。⁽⁴⁾ 共働きが圧倒的多数を占める現代アメリカの家族では、第一の勤務を終えた後に家庭で待つている第二の勤務である「セカンド・シフト」⁽⁵⁾、すなわち再生産労働の分担をめぐるせめぎあいの中、女性のみならず男性たちもまた職業と子育てを含む家庭という二つの役割を両立させることを迫られている。本稿では、子育て (child care) に直接的参加をする現代の父親が持つような「家庭性」^{ドメスティシティ}あるいは「近代的父性 (modern fatherhood)」の出現の源泉に存在していたとされる「男性的家庭性」という概念についての議論を中心に、最近の「父性」の歴史研究に依拠して整理してみたい。

一 「父性」の定義

社会史研究の中で「父性 (fatherhood)」という用語が明確に定義されることなく使用される場合が多く見受けられたが、最近のラルフ・ラロッサの著書 *The Modernization of Fatherhood: A Social and Political History* の中でこの用語の定義が試みられているのでまずそれを見てみよう。

父性は社会的役割および社会・歴史的制度として概念化されるべきである。また父性は、男性が父になったり、あるいはなろうとするときに従うとされる規範から構成されるといえる。(すなわち以下の要素から構成される。) 子どもや他の父でない行為者が、父であるふりをするときに従う規範。人が父に対して抱く感情や態度。正当であろうがなからうが、父が過去において行なった行為、現在そして未来において行なっているか行ないうることについての認識。父を敬いまた時には、周縁化する祝祭や儀式(例えば、父の日や母の日)。そして最後に、男性が「父らしく」振る舞おうとするときにとる日常的諸行為。⁽⁶⁾

ラロツサが強調するのは、ちょうど「母性 (motherhood)」の場合もそうであるように、「生物学的状態」としての概念ではなく、「人びとが共通してもっている想像の産物」としての側面である。⁽⁷⁾そして、その「父性」という概念がもっている重層的要素を射程にいれつつ、「父性の文化」→男性が親であることをめぐる規範、価値、信念、及び父性の行為→父が行なうことや彼らの父としての行動との連関」に着目する重要性をラロツサは示唆している。⁽⁸⁾

ラロツサのように「父性」という語を定義するとき、英語の“fatherhood”の訳として「父性」は必ずしも適訳ではない。日本語として最も近い表現は「父であること」という意味になるのであろうが、本稿の中では、便宜上「父性」という語を当てた。

二 ヴィクトリア時代後期の男性性

アメリカ合衆国における女性史や家族史の分野で、一九世紀半ば前から末までをさすヴィクトリア時代は、植民地時代や二〇世紀と比して最も豊かな研究業績の蓄積がある。「母」「女性性」「女性文化」「家庭性」のイデオロギー等をめぐるヴィクトリア時代の研究を通して、ジェンダーによって分離されたとされる「領域」の概念やそれを支える「近代家族」の特徴等がこれまで広く議論されてきた。これに対応して、「父性」を含む「男性性」の研究もまずヴィクトリア時代からモノグラフ的研究が発表されてきた。

歴史研究の中での「父性」も、これまでの女性史・家族史研究を土台にして、これまで注目されることのなかった、家庭内における男性の役割をその中心的な視座に据えたとき、必然的に可視化されてきたといえる。ラロツサは「父性」を理解するための「使用可能な過去 (usable past)」が欠如していたことを議論するために、アメリカ女性史の「母」といわれているガード・ラーナーを引く。女性の歴史——たとえば、少なくとも紀元七世紀以来家父長制と闘い自らの権利を主張してきた活動家の存在——をほとんどの女性たちは知らされていないというラーナーの議論に依拠しながら、また、男

性も親として子育てにかかわってきた歴史を知るための「使用可能な過去」を奪われていると主張する。(但し、ラロツサは、抑圧という意味において女性史と「父性の歴史」の場合とは、重大な相違点があることを認めている。)子育てにかかわる男性の存在は歴史的にみて不可視な状態に留められてきたので、父と子の関係は常に、現在は過去よりは「まし」になつていくという認識しかうまれない状況が作り上げられていたとラロツサは述べる。すなわち、「女性的なるもの」とされてきた「ケア」労働、あるいは女性学研究でいわれる「愛の労働」にかかわった部分の男性の歴史は、正當に評価されずに無視され隠蔽されてきたのである。⁽⁹⁾

(一) デイモスによる概観

それでは、まず「父性の歴史 (History of fatherhood)」研究に端緒を開いたデイモスが、一九世紀を中心に「父性」をどのように捉えているかみてみよう。(デイモスは一九世紀を前半と後半で明確に区別していないので、一九世紀後期のみ絞って彼の議論を検討することができない。)

産業化の進行とともに労働と家庭の場が分離し、性別によつて配置される「領域」が決定されるようになった。それが「近代家族」を構成する重要な特徴の一つであるのだが、男性は、家族を離れ公領域ににかけて金を稼ぐ「大黒柱」という役割を担った。一九世紀以前も家族に「物やサービスを供給」することはしていたが、初めて家族を離れた場で父としての主要な役割を遂行することになったことをデイモスは強調する。つまり、親としては「パートタイム」の親になり、家族の日々の生活から一定の距離を持つことが、一九世紀の「父性」に新たに出現した特徴である。「大黒柱」の役割を完全に担うこと、すなわち子どもとほとんどの時間離れていることが「父」としての養育責任を果たすことになった。労働の内容は、子どもや妻に植民地時代のように具体的に理解されることはないが、労働の結果が収入という形で家族から評価されると同時に、男性自身の自己評価にも大きな意味を持つようになった。⁽¹⁰⁾

一方、女性にとつては私領域で子どもに特別な配慮を注ぎ教育を施す母の役割が肥大化した。肥大化した母役割が強調

される中、一九世紀における父の権威は植民地時代と裏腹に弱体化し、父の家庭内における影響力は母のそれと逆コースを辿ったことがしばしば指摘されてきた。育児書が、植民地時代には父に対して書かれていたが、一九世紀に入ってから母に対して書かれるようになったことや、離婚時に養育権は一九世紀初頭では父に渡されていたが一九世紀末には母へ渡されるように変化したこと等が象徴的な例としてあげられてきた。また、一九世紀全般を通して、父は子どもへの愛情をそれ以前よりもっとオープンに表現するようになったことも指摘してはいるが、基本的に父の影響力はより制限され、母の側へより濃厚な関係がシフトしていったことを示唆している。⁽¹¹⁾

デーモスによれば、一九世紀末から二〇世紀初頭にかけて以上のようなヴィクトリア的ジェンダー観は完成したという。業績をあげることが奨励された一九世紀末、男性にとつての「大黒柱」の役割はますます重要な要素となり、職業と家庭はさらに対立的な場として機能するようになった。一九世紀末に登場した郊外に住むライフスタイルは「仕事と家庭の二分化」を強調するものとなった。このため、「大黒柱」として家族から尊敬や感謝は得られたものの、父は家庭からますます離脱したところにおかれる存在になったという。しかし、二〇世紀に入ると、「新しく『よりソフトな』一つの役割」が加わったとデーモスは述べる。その役割とは、子どもと共に「仲間としての活動」を行なうことである。レクリエーションに参加し、家庭内の諸事（例えばガーデニング、壁紙の張り替えやペンキの塗り替え等）にも貢献する父親像だ。世代、経験、社会的地位を越えて、仲間として対等な立場で父子が関係を持つことが模索されるようになった。この時期に、「dad」とあるいは「daddy」という呼び名が使用され始めたこともデーモスは言及している。⁽¹²⁾

デーモスが指摘したように、ヴィクトリア的ジェンダー観を先鋭化させた一九世紀末における郊外化と、二〇世紀初頭に出現したという「新しく『よりソフトな』一つの役割」を（時期と郊外の解釈にずれがあるものの）更に具体的に概念化したのが、次に紹介するマーシュ論文である。

(二) マーシュの「男性的家庭性」マスキュリン・ドメスティシティ

デーモスの「父性」をめぐる論考が発表された六年後の一九八八年、マーガレット・マーシュは“Suburban Men and Masculine Domesticity, 1870-1915”という論文の中で、南北戦争以降一八七〇年代に入って男性に対して新たな規範が出現し始めていたことを指摘し、「男性的家庭性」という概念を提示した。マーシュの論文に依拠して、彼女が提起した「男性的家庭性」という概念をみてみよう。⁽¹³⁾ 彼女は、以下のとおりに定義する。

男性的家庭性は、それが何であるかというより、何でなかったかを言うことの方が簡単だ。それは、フェミニズムに相当するものではない。すべての家事を平等に分担することでもない。より大きな社会で男性と女性が同一の機会を持つべきという確信に至ることでもない。しかし、それは、日々の子育ての何がしかにこれまでより大きな責任を持つことに同意し、仕事から離れた時間を息子や娘たちと遊び、教え、でかけることに費やす父親の行動基準である。家庭的な男性はまた、夕方の外出時は、男友達ではなく常に妻を同伴する。特別の場合を除いては暖炉の掃除やベッドを整えたりはしないかもしれないが、彼の父親が期待していたのよりはずっと多くの関心を家庭運営の様々な事項や子どもたちの世話に払っている。⁽¹⁴⁾

この「男性的家庭性」の出現の背景に、三つの条件が必要であったことをマーシュは付け加える。

(1) 性による分離を促した家父長的な支配あるいは家庭性のイデオロギーに代わって、伴侶性(コンパニオンシップ)が強調された結婚の理想、(2) 中産階級の男性である夫がこれまで以上に家族に専心できるほどに十分な職業的安定をもたらした経済システム、(3) 家族に対する新たな意識を適切に空間的に表現できるような物理的な場。⁽¹⁵⁾

すなわち、第一に「中産階級の婚姻内での権力関係に微妙な変化が起き」、第二には安定的な収入をもたらずような「企業の成長」、第三には「郊外が伴侶性の高い^{コンパニオニット}家族を作りだすのに適切な場としてみなされ始めるようになった」ときに「男性的家庭性」が出現する条件が整ったとする。⁽¹⁶⁾

マーシュは、南北戦争後、家庭性のイデオロギーによって支えられていたジェンダーによる領域分化は弱体化していく傾向を持ったことを指摘している。なぜなら、参政権運動、社会改革運動、高等教育への参入、教職や工場労働の賃労働への参加等によって代表されるように、一九世紀後半には女性たちが領域を越えて男性の領域とされた公領域に進出していったからだ。「女性の役割が変化したことはまた男性の役割が変化したことを意味した。女性が男性の世界に入っていくにつれ、男性も女性の領域とされたところに参入し始めたのだった。」⁽¹⁷⁾つまり、いわゆる「領域」の崩壊の起点に「男性的家庭性」の源泉をマーシュは見るのである。

その一つの根拠として、一九世紀半ばと一九世紀末および二〇世紀初頭との間に分節点があり、男女両方に対して書かれたアドバイス・ブック等に見られる規範書（執筆者も男女両方）に変化があったことをマーシュは示唆している。例えば、女性へのアドバイスでは、よりよい妻になるために女性が家庭外へも関心を持つようになり、女性同士で時間を過ごすことから変化して、夫婦の絆の重要性が強調されるようになった。一方男性に対するアドバイスも変化し、「妻との感情的親密さ」や「子どもとコンパニオンとして時間を過ごす楽しみ」を持つことが勧められるようになった。一九世紀半ばに強調されていた「従順、規律、家長としての父親の役割の重要性」から変化して、二〇世紀初頭には父は子どもに対して「友達関係」^{フレンドシップ}を形成することの重要性が強調され、「親友」^{チャム}として遊び相手になることが助言されるようになった。⁽¹⁸⁾

以上のような特徴を持つ「男性的家庭性」の概念は、新たに付与された「父」としての役割が、公領域で必要とされた攻撃性の「安全なほけ口」として機能し、当時の「男らしさ」(「manliness」)とは補完的な関係にあったとマーシュは議論する。⁽¹⁹⁾

一方でマーシュは、「男性的家庭性」の規範の出現を第一波フェミニスト運動以降の一九世紀における女性たちの変化に

対する「男性側からの返答」として捉えることもできると指摘している。「伝統的に女性的とされていたものを男らしさの中に取り入れ再定義することは、一面においてフェミニスト運動に対抗する試みであった」という彼女の結論はきわめて興味深い。すなわち、「女性は男性と同等に個人としての達成を求める権利を有していると主張するフェミニストへの、男性側からの返答として男性的家庭性はその役割を果たした。」具体的には、郊外という空間に家族を移動し「個人よりも家族のニーズを優先する家庭内に父が引き込まれる」ことで「個人的達成や個別のアイデンティティ」を主張していたフェミニストへ、家庭性の重要性を男性の側から提示することになったという。その意味において、女性の公領域への参入が制限されていた状況において、「男性的家庭性」はフェミニストの主張に対する「代案」として「フェミニズムの目的をそらす」役割を果たしていた可能性をマーシュは結論で示唆している。⁽²⁰⁾

(三) ロタンドによる「内なる女性性」

一九九三年に出版された、*American Manhood : Transformations in Masculinity from the Revolution to the Modern Era* に合衆国における男性性の歴史的展開を著した E・アンソニー・ロタンドによれば、一八八〇年代および一八九〇年代には中産階級の男性は、「『女性的』とされた新たな習慣や仕事」に従事するようになる傾向があったという。しかし、マーシュの「男性的家庭性」という概念に対してロタンドは、「ジェンダーのメタファー」という観点から鑑みれば、これは男性に困惑をもたらした「言葉の矛盾」であったと指摘する。なぜなら「男性的家庭性」という概念は、「男性は、男性の資質に適合的でない女性の任務を行なえるし、またそうすべきであると前提にしているからである。もし男が、家庭で、女性にふさわしいとされたことをするために、家の中に長くいるようになったら、彼は一体どんな男性なのか」ということになっただろうと疑義を呈している。⁽²¹⁾

一方でロタンドは、一九世紀を通じて、父親が家庭外で労働をしている間に、家庭内で影響力を持った母親が男児に女性的価値観を植え付けていたことも指摘している。そのためもあってか一九世紀末になると、余暇や家庭内での娯楽等の

「女性的」とされたものへの指向を男性が表現することが許容されるようになった。⁽²²⁾

また、ロタンドは「父性」をめぐる一九八五年に出された別の論考で、一九世紀末において中産階級の家庭における父親の「物理的な不在」が顕著になるつれ、子どもとの「心理的な不在」が明確化したとしているが、他方で、子どもと感情面で父親としてかわりあう「新しい関係」を持つ男性が一部で出現したのも同時期であると指摘している。この「父親不在」と「父親参加」という相対立する二つの傾向が混在するようになったのが一九世紀末であり、この傾向は一九六〇年代まで継続したと言及している。(但しロタンドによれば、これらの両極に共通するのが、「家父長的父性」の衰退である。母親が「家族の情緒を支える核」となる一方、父親の家父長的な役割は相対的に縮小した。)一九世紀末には、家父長のかた苦しさを持った父親像は衰退し、子どもとの間に親密な感情的絆を築くという情緒面での新しい傾向がみられ、「父親不在とは反対の傾向が、静かにそしてあまり注目されなかったが、一九世紀末に出現し始めた。」⁽²³⁾

マーシュとロタンドが共に明示している一九世紀末の父役割における変化を「男性的家庭性」という概念との関連でどのように把握できるのだろうか。父性をめぐる研究で最も新しい著書の中でラロツサがその点を明晰に議論している。以下で「新しい父性」の原点に結びつくラロツサの整理を検討してみよう。

三 「新しい父性 (New Fatherhood)」の原点——ラロツサの整理

「男性的家庭性」は、マーシュが述べるように、当時の「男らしさ」と補完的な関係にあるものだったのか、あるいはロタンドが反論するところ、矛盾するものであったのだろうか。ラルフ・ラロツサは、両者の提起している問題をマーシュ論文が所収されている研究書の中の別の論文で使用されていた、「家庭的男性性 (domestic masculinity)」⁽²⁴⁾という概念を「男性的家庭性」と比較検討することで、男性をめぐる家庭性の問題を整理している。一九九七年に出版された *The Modernization of Fatherhood: A Social and Political History* の中でラロツサが展開する議論を要約しつつ辿ってみよう。⁽²⁵⁾

「男性的家庭性 (masculine domesticity)」は「子育てを含む家庭内の諸事を男性的な方法で行なう」ということを意味する。しかし、「家庭的男性性 (domestic masculinity)」という用語は、「男性である何者かを“domesticate”する」意味を持つことになるという。マコド、ラロッサは“domesticate”という用語には、辞書によれば基本的に以下の三つの意味があると指摘する。「家庭の中に連れてくる (bring into the home)」、教化する (civilize)、和らげる (tame)」という三つの意味に置き換えて「家庭的男性性」の意味を捉え直す。第一の意味で理解する場合、男性が世紀転換期に余暇を家庭で過ごす傾向が強まったとされることに結びつく。第二の意味では、この時代に男性は女性たちとより多くの時間を過ごすようになり、夫婦単位で活動する文化活動に参加するようになったことを「家庭的男性性」と見なすことができる。第三の意味では、男性が持つているとされた「生得的野性」の抑制(和らげる)という捉え方をする事ができる。子どもとこれまで以上に時間を過ごすということ自体、当時想定されていた「男性性」とは異質の行為として理解できるのかもしれない。

以上のように、“domesticate”という用語の持つ意味から「男性的家庭性」および「家庭的男性性」を考察することで、まず「男性的家庭性」は、少なくとも「家庭的男性性」ほど「言葉の矛盾」となるものではないという結論をラロッサは導き、「男性的家庭性は男性性に抵触しない」と述べる。すなわち、マーシユの「男性的家庭性」は妥当であるとする。むしろ「家庭的男性性」という場合に異なるニュアンスがもたらされる可能性があるという。「家庭的であることが女性的であることと同一視され、女性性が男性性と対立するものとみなされているなら」、「男性にとつては「家庭性」は「非男性性化」という葛藤をもたらすものとなるであろう。すなわち、ロタンドが言及したような「彼は一体どんな男性なのか?」といった問題が生じる可能性がある。この文脈においてラロッサは、ロタンドが述べた「言葉の矛盾」の可能性も妥当な指摘であるとする。

以上のように「男性的家庭性」と「家庭的男性性」を区別して考察することで、ラロッサはマーシユとロタンド両者の立論が妥当であることに到達する。そして、一九世紀末から二〇世紀初頭にかけて中産階級の男性に三つの役割を果たす期待感が持たれていたことを確認している。まず第一にもっとも重要なものとして、「経済的な大黒柱としての役割」を全

うすること。第二に、「男性的家庭性」、すなわち「男性は男性的なるものを家庭内の仕事に注入するべきとする規範」、第三に、「家庭的男性性」、すなわち「男性の男らしさは家庭内に軟禁され(少なくとも夕べには)、教化され、和らげられる必要があるという行動原理」である。

ラロッサが示唆する通り、一九世紀末から二〇世紀初頭にかけて合衆国の産業化・都市化が進行する中で、中産階級の男性には大黒柱の役割が一層強化されていったが、また同じ時期に表面上は相対立するように思われる、父への新たな期待・役割が出現したのである。これは、結婚観の変容とも関連している。規範としてはそれ以前に存在していたものの、「都市部の中産階級においてさえも民主的な結婚が実践として制度化されるようになったのは、一九世紀末から二〇世紀初頭であった」とラロッサは先行研究に基づいて確認している。つまり、「カップルは子どもを産み、共に保護する存在であると同時に、生涯の友でもあるべきということが、民主的な結婚におけるルールだった」のだが、パートナーシップを重視する結婚観が規範としても実践としても定着するようになったことで、男女の境界を柔軟なものとする影響がもたらされた。このことが、「男性的家庭性」と「家庭的男性性」の展開に結びついたとして⁽²⁶⁾いる。

家庭内で子育てや家事に今まで以上に男性がかかわることで、収入を提供する以上の貢献を家庭内にもたらすべきであるという規範が提示されるようになった。すなわち、家庭外での労働がもたらす収入という形で男性の大黒柱の役割が最も重要になって以来初めて、彼らは家庭内において現代でいう「セカンド・シフト」に貢献するよう期待された⁽²⁷⁾とみなすことができる。ラロッサは示唆する。大黒柱の役割は第一義的に男性に期待された任務ではあったものの、この時点から、「男性的家庭性」および「家庭的男性性」がそれに付与されることで、父性は変容を迫られるようになったと指摘する点がラロッサの整理の重要な要素となっている。ここにいわゆる「新しい父性(New Fatherhood)」の原点がみられるのである。⁽²⁸⁾

むすびにかえて

これまで、「近代家族」を議論する文脈の中で、「家庭性」は「女性性」と直線的に結びつけられて考察されてきた。男性の持った「家庭性」のあり方を探ることは、不可視であった「父性」の歴史を掘り起こすことに通じる。中産階級の女性は男性と時差を持って公領域に賃金労働者として参入していったが、また男性も同様に時差を持って私領域で特に父役割をとおして質的・量的差異はかなり認められるものの、ケア労働を期待される存在としてみなされ始めたといえるのではないか。「男は外、女は内」という近代家族論の二項対置的図式を見直し、「男性性」の側からも「家庭性」にかかわる歴史の経緯を注意深く検証していく必要がある。

また、マーシュが指摘しているとおり、第一波フェミニストの主張に対して、その目的をそらすような返答として「男性的家庭性」を捉える視点も現代に示唆するものが大きい。更に、ヴィクトリア時代は、女性の「家庭性崇拜」(the cult of domesticity²⁹)の根幹となる時期と考えられていたが、その後期に分節点があったことも男性性及び父性を検討することを通して鮮明化してくる。そういった意味においても、ジェンダー・ヒストリーといわれる視座から、「父性」を含む「男性性」の歴史を研究することの重要性を以上で紹介した最近の歴史研究の動向は明示しているといえるだろう。

△付記▽ 明石紀雄先生には、草稿を読んで頂き貴重なコメントやアドバイスを頂いた。ここに記して感謝したい。尚、本稿は、松下国際財団による研究助成(一九九七—一九九八)による△一般研究▽「津田梅子と近代日本の女子教育改革——アメリカ合衆国からの△女性文化▽の移入をめぐる」の研究成果の一部である。

- (1) John Demos, "The Changing Faces of Fatherhood," in Stanley H. Cath, Alan R. Gurwilt, and John Munder Ross, eds., *Father and Child: Developmental and Clinical Perspectives* (Boston: Little, Brown, 1982), pp. 425-45. 原邦彦博士の文庫の中であったが、以下の文庫にも所収がある。John Demos, *Past, Present, and Personal: The Family and the Life Course in American History* (New York: Oxford University Press, 1986), pp. 41-67. 本書の「序言」を参照せよ。
- (2) *Ibid.*, pp. 42-43.
- (3) 原邦彦博士の文庫を参照せよ。また参考。E. Anthony Rotundo, "American Fatherhood: A Historical Perspective," *American Behavioral Scientist* 29 (September/October 1985), pp. 7-25; Mark Carnes, *Secret Ritual and Manhood in Victorian America* (New Haven: Yale University Press, 1989); Mark Carnes and Clyde Griffen, eds., *Meanings for Manhood: Constructions of Masculinity in Victorian America* (Chicago: University of Chicago Press, 1990); Stephen M. Frank, "Rendering Aid and Comfort: Images of Fatherhood in the Letters of Civil War Soldiers from Massachusetts and Michigan," *Journal of Social History* 26 (Fall 1992), pp. 5-31; Robert L. Griswold, *Fatherhood in America: A History* (New York: Basic Books, 1993); E. Anthony Rotundo, *American Manhood: Transformations in Masculinity from the Revolution to the Modern Era* (New York: Basic Books, 1993); Michael Kimmel, *Manhood in America: A Cultural History* (New York: Free Press, 1996); Ralph LaRossa, *The Modernization of Fatherhood: A Social and Political History* (Chicago: The University of Chicago, 1997).
- (4) Griswold, *Fatherhood in America*, p. 224. また、拙稿「男性運動」(『セカンダリ・シフト』から『ダヴィー・トランシット』) 明石紀雄・川島浩平編『現代アメリカ社会を知るための60章』明石書店、一九九八年)も参照されたい。
- (5) アーリー・ホックシールド(田中和子訳)『セカンダリ・シフト(第二の勤務)——アメリカ共働き革命のいま』朝日新聞社、一九九〇年。
- (6) LaRossa, *The Modernization of Fatherhood*, pp. 10-11.

- (7) *Ibid.*, p. 14.
- (8) *Ibid.*, p. 11.
- (9) *Ibid.*, pp. 3-5.
- (10) Demos, "The Changing Faces of Fatherhood," pp. 48-60.
- (11) *Ibid.*, pp. 60-62. 著者 Carl N. Degler, *At Odds: Women and the Family in America from the Revolution to the Present* (New York: Oxford University Press, 1980) を参照。
- (12) Demos, "The Changing Faces of Fatherhood," pp. 60-62.
- (13) Margaret Marsh, "Suburban Men and Masculine Domesticity, 1870-1915," in *Meanings for Manhood*, pp. 111-127. 以下の論文の初出は ' *American Quarterly* 40 (June 1988), pp. 165-86 を参照。本稿での引用ページ数は前者による。
- (14) *Ibid.*, p. 112.
- (15) *Ibid.*, pp. 112-113.
- (16) *Ibid.*, p. 113.
- (17) *Ibid.*, p. 113.
- (18) *Ibid.*, pp. 116-117, p. 122.
- (19) *Ibid.*, p. 122.
- (20) *Ibid.*, pp. 126-127.
- (21) Rotundo, *American Manhood*, p. 263.
- (22) *Ibid.*, pp. 14-15.
- (23) Clyde Griffen, "Reconstructing Masculinity from the Evangelical Revival to the Waning Progressivism: A Speculative Synthesis," in *Meanings for Manhood*, pp. 183-204.
- (24) 以下の「男性的家庭性」は「家庭的男性性」についてのロッセアの議論を LaRossa, *The Modernization of Fatherhood*, pp. 31-34 を参照。第二章の註五にも参照。

- (26) *Ibid.*, pp. 34-35.
- (27) *Ibid.*, pp. 30-31.
- (28) *Ibid.*, pp. 39-40.
- (29) ホックシールド 『セカンド・シフト』 第一六章。

(津田塾大学
アメリカ社会史)